

真情橋(まごころばし)物語

こうずい こわ なお
～洪水で壊れた橋を直した6少年～

このお話は、松山市味生地区の南斎院町と北斎院町の間を流れる津田川(現宮前川)にかかる1本の橋にまつわる物語です。

昔から、地域の人々にとっても、子どもたちにとっても、毎日通る大事な石橋でしたが、大正12年(1923年)7月、悲劇が起きました。台風による大雨で洪水となり、その橋の北半分がななめにくずれ落ちてしまったのです。川は水かさが増して、泥水が音を立てて流れています。

学校に行くにも、役場や駐在所に行くにも、この橋を渡らなければ遠回りをしなければなりません。一番不便を感じていたのは、南斎院(西側地区)から味生尋常高等小学校に通学する30名の子どもたちでした。

両側に縄を張り、くずれた石橋を、腹ばいで水浸しになりながら通学を続けていました。女の子たちはこの危ない橋を渡ることができず、いつも4キロメートル近く遠回りをして登校していたのです。また、男の子たちはかたむいた橋をはい上がり、登校していました。低学年の子にはとてもむずかしいことだったのです。

この地区には、小学校高学年をリーダーとする「早起き会」があり、朝早く起きて道路の清掃や家の手伝いを心がけていました。橋が落ちてからは、「早起き会」メンバーの子どもたちは、低学年の子を背負って川を渡り、下校時も手を引いて家に送っていました。

半年たった大正13年1月14日のことです。その日は、前夜から降り続いた雪が、あたり一帯をまっ白くおおっていました。早朝の冷えこみで橋の上



は凍りついでいました。

「きゃあーっ」バシャーン！

突然の悲鳴に、「早起き会」リーダーの忠徳少年はびっくりしました。

急いでかけ寄ると、1年生の男の子が2人、橋の下のくぼみに落ちてもがいていました。忠徳は、すぐに手をさしのべて助け上げましたが、2人とも泥まみれでした。

忠徳は、橋を見つめてくちびるをぐっとかみしめました。

毎朝、困った様子を目にしていた忠徳は、「どうして、こわれたままになっているのだ。大人たちはどうして直さないのだ」「何か事情があるのだろうか」「そうだ、早起き会で橋を直そう」と思いました。

学校からの帰り道、忠徳は、常光・勇・巖・武行・清の5人の友達を橋の所に集めました。

「おい、見てみいや。橋がこわれてから、みんなが苦勞して学校へ行っどるじゃろう」



玉柳 勇 高等科一年

一色 清 尋常科五年

一色 常光 高等科一年

一色 忠徳 高等科二年

一色 武行 尋常科五年

山之内 巖 尋常科五年

「うん。だれか大人の
人に話したらどうじゃ。お
れらの力じゃあ……」

「ああ。じゃが、今まで
だれも直してくれんが。お
れらの力でも、何とかでき
るはずじゃ。力を合わせ
て直してみようや」と、話
がまとまりました。

次の日、朝早く「早起
き会の奉仕作業」と銘打
って、6人は、スコップ・じょ
うれん・くわなどを持って集
まりました。

「さあ、始めるぞ。一番先は穴うめや。あそこの川砂を掘って運ぶのや」

忠徳はてきぱきと指示を出しました。

まず初めに、川砂を掘って、山盛りにしたじょうれんの砂を何ばいも橋の上に運び、積み上げようとした。が、砂はひび割れた石のすき間から、あっという間にくずれ落ちてしまいます。

その上、手はかじかんでくるし、足元はすべるし、とても思うようにスコップやくわも使えません。

「ええいっ。こんなことじゃ、どうにもならん。めんどろだ。手で石をひろって穴につめるぞ」

まっさきに忠徳がスコップを投げ出すと、大きく腕まくりをして川の中に入り、石をひろいはじめました。勇たち5人は、ちょっと顔を見合わせましたが、リーダーの忠徳に続きました。

1月の川の水は、手が切れるように冷たく、北風は6人に吹きつけます。かじかむ手に息を吹きかけつつ、がんばったのでした。

次の日の朝も、6人は4時に起きて集まりました。

昨日の道具のほかに、俵や縄も持ってきています。俵に川砂をつめ込み、落ちたところに積み重ねようというのです。俵はずっしりと重く、一人の力ではびくともしません。

「もういやじゃ。手が痛いよう。いやじゃいやじゃ、やめようや」

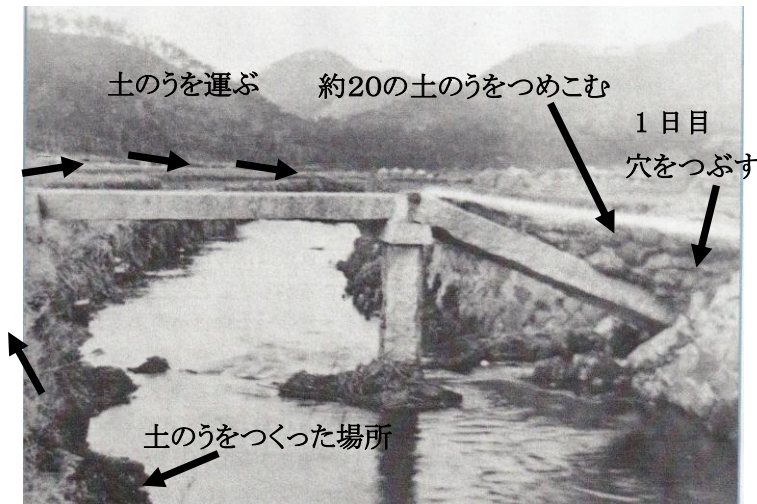
一番小さい清が、あかぎれで血がにじんだ指をなめながら、べそをかきはじめました。

「しかたないのう。みんな、清の分もがんばって土のう(俵に土砂をつめたもの)をどんどんつくろう」

忠徳が言うと、あとの4人も力を合わせて土のうをつくり続けました。清も涙をふきながら、また砂を入れはじめました。



土のうができあがると、いよいよ橋の上に運ぶ番です。一つの俵^{たわら}を2、3人で南の土手^{どて}におし上げ、橋の上まで運び、最後は、橋のかたむきを利用して土のう^{ころ}を転がすのです。こうして、6人は、けんめいに土のうを運び続け穴^うを埋めていきました。



修復された当時の真情橋

まいた川砂が、太陽にきらきらと輝^{かがや}いています。

それは、大正13年(1924年)1月20日の朝のことでした。

その後、6少年の善行^{ぜんこう}に心打たれた味生村青年団は、村人に寄付^{きふ}を募^つって本格的な橋の修理^{しゅうり}を行いました。そして、少年たちと村人たちの「まごころ」にちなんで「真情橋」と名づけて、そばに石碑^{せきひ}も建立^{こんりゅう}しました。その石碑は、現在の味生小学校に残っています。

また、善行の一部始終^{しじゅう}を見ていた豆腐^{とうふ}の行商人^{ぎょうしょうにん}が新聞社^{しんぶんしゃ}に知らせたところ、全国的に有名になり大勢の人たちが「真情橋」の見学に来るようになりました。翌大正14年(1925年)には文部大臣表彰^{もんぶだいじんひょうしょう}を受け、修身^{しゅうしん}(今の道徳)の教科書にものせられました。

時^へを経て、味生地域には新しく味生第二小学校^{たんじょう}が誕生しましたが、それを記念^{きねん}して元の味生小学校には「真」、味生第二小学校には「情」の石碑が建てられました。6少年の善行^{ぜんこう}を受け継^つぎ、両校は「真」と「情」を一つに「まごころ教育」に力^{そそ}を注いでできました。

そして、7日目の朝、橋の上には、真冬だというのに顔^{あせ}いっぱい汗を光らせた6人が、晴れ晴れとして立っていました。ついに完成^{かんせい}したのです。橋に埋めた土のうの数は20俵にもなっていました。

できあがった橋の上に

また、「まごころ(=人のために尽くす心)」は校区の津田中学校にも引き継がれ、生徒同士がグループで話し合う「まごころタイム」や、先生が学習相談にのってくださる「まごころ教室」もつくられています。「まごころ教室」は、生徒たちから「先生からの『まごころ』を感じるができる場所の一つ」と言われています。

今も味生地区の小・中学生たちは、6少年の「まごころ」に思いを馳せながら橋の上を仲良く行き来していることでしょう。



真情橋の石碑(味生小学校内)



現在の真情橋

引用や参考にさせていただいた本や資料(出典)

- 「真情橋物語」(味生小学校教員)
- 「校訓への道」(味生小学校ホームページ)
- 「放送朝会(校長先生のお話)」(味生第二小学校ホームページ)
- 「私たちのふるさと松山学」(津田中学校)
- 「まつやまフィールドミュージアムだより」(南海放送)